

# 湖水の女

鈴木三重吉

青空文庫



むかしむかし、或山あるの上にさびしい湖水がありました。その近くの村にギンという若ものが母親と二人でくらしていました。

或日あるひギンが、湖水のそばへ牛をつれて行って、草を食べさせていますと、じきそばの水の中に、若い女の人一人、ふうわりと立って、金きんの櫛くしで、しずかに髪をすいていました。下にはその顔が鏡にうつしたように、くつきりと水にうつっていました。それは何なんとも言いようのない、うつくしい女でした。

ギンはしばらく立って見つめていました。そのうちに、何だか、

じぶんのもっている、大麦でこしらえたパンとバタを、その女の人にやりたくなつて、そつと、岸へ下りていきました。

女は間もなく、髪をすいてしまつて、すらすらとこちらへ歩いて来ました。ギンはだまつてパンとバタをさし出しました。女はそれを見ると顔をふつて、

「かさかさのパンをもつた人よ、

あたし私はめつたに、つかまりはしませんよ。」

と言うなり、すらりと水の下へもぐつてしまいました。

ギンは、がっかりして、牛をつれてしおしおと家へかえりまし

た。そして、母親にすべてのことを話しました。母親は女の言つた言葉をいろいろに考えて、

「やっぱり、かきかきのパンではいやなのだろう。今度は焼かないパンをもつてお出いでよ。」と、おしえました。それでギンは、そのあくる日は、パン粉この、こねたばかりで焼かないままのもつて、まだ日も出ない先に、いそいで湖水へ出かけました。

そのうちに日が山の上へ出て、だんだんに空へ上のぼつていききました。ギンはそれからお午ひるじぶんまで、じつと岸にまつていました。しかし湖水にはただ黄色い日の光がきらきらするばかりで、昨日きのうの女の人はいつまでたつても出て来ませんでした。

それからとうとう夕方になりました。ギンはもうあきらめて家へかえろうともしました。

するとちようどそこへ、夕日をうけた水の下から女の人があつ

と出て来ました。見ると昨日よりも、もつともつとうつくしい人になっていました。ギンは、うれしさのあまりに口がきけなくて、だまってパン粉のこねたのをさし出しました。すると女はやっぱり顔をふって、

「しめったパンをもった人よ、

あかし  
私はあなたのところへはいきたくはありません。」

こう言つて、やさしくほほえんだと思うと、またそれなり水の下へかくれてしまいました。ギンはしかたなしにとぼとぼお家へかえりました。

母親はその話を聞くと、

「それではかたいパンもやわらかいパンもいやだというのだから、

今度は半焼はんやきにしたのをもって行ってごらんよ。」と言いました。

その晩ギンはちつとも寝ないで、夜よが明けるのをまつていました。そしてやつとのこと空があかるくなると、いそいで湖水へ出ていきました。すると、間まもなく雨がふつて来ました。ギンはびつしよりになったまま、また夕方まで立っていました。けれども女の人にはちよつとも出て来ません。しまいにはだんだんと湖水も暗くなつて来ました。ギンはがっかりして、もうお家うちへかえろうと思ひました。すると、ふいに一ひとむれの牛が湖水の中からうき上つて、のこのことこちらへ向つて歩いて来ました。

ギンはそれを見て、ひよつとすると、あの牛の後うしろから湖水の女が出て来るのではないかと思ひながら、じつと見ていますと、ち

やんとそのとおりに、間もなく女の人も出て来ました。そして昨日よりもまたもつとうつくしい人になっていました。ギンはいきなりざぶりと水の中へ飛び下りてむかひにいきました。

女は今日きょうはギンがさし出したパンを、ほほえみながらうけとつて、ギンと一しよに岸へ上あがりました。ギンはそのときに、女の右の靴くつのひものむすびかたが、左のとちがつているのをちらと目にとめました。ギンは、ようやく口をきいて、

「わたし私はあなたが大好きです。どうか私の家の人になって下さい。」とたのみました。しかし女の人はように聞き入れてくれませんでした。ギンは言葉をつくして、いくどもくたのみました。すると湖水の女はしまいにやっと承知して、



「それではあなたのお嫁になりました。ですけれど、これから先、私が何の悪いこともしないのにむやみにおぶちになったりすると、三どめには、私はすぐに湖水へかえってしまいますがようございませうか。」と、ねんをおしました。ギンは、

「そんな乱暴なことはけつしてしません。あなたをぶつくらいなら、それより先に私の手を切り取ってしまいます。」

こう言つてかたくちかいをしました。そうすると、どうしたわけか湖水の女はふいにだまつて水の中へ下りて、牛と一しよに、ひよいと姿をかくしてしまいました。ギンはびつくりして、いきなり後<sup>あと</sup>を追つて飛びこもうとしました。すると、後<sup>うしろ</sup>から、

「これこれおまちなさい。そんなにさわがなくてもいい。こつち

へお出いでなさい。」と、だれだか大声でよびとめるものがありました。ふりむいて見ますと、少しはなれたところに、まっ白な髪をした品ひんのいいおじいさんが、二人の若い女をつれて立っています。ギンはこわごわそばへいきました。よくみると、その女の一人はたった今水の中へ消えたばかりの湖水の女でした。それからもう一人の女を見ますと、ふしぎなことには、それもさつきじぶんのお嫁になると言った、同じ湖水の女でした。ギンはじぶんの目がどうかなのではないかと思いました。おじいさんは、

「これは二人とも私わたしの娘だが、おまえさんはこの二人のどちらが好きなのか、それをまちがいなくおしえておくれ。そうすれば、

のぞみどおりお嫁に上げましょう。」と、やさしく言ってくれました。

ギンは一しようけんめいに二人を見くらべましたが、二人とも顔も背せいも着物もかざりも、そっくり同じおんなで、ちっとも見わけがつかまません。もしまちがえたらそれきりだと思うと、ギンは気が気ではありませんでした。けれども、いつまで見くらべていても判断がつかないので、どうしたらいいかどこまっていますと、一人の方が、片足をかすかに前へ出しました。目には見えないくらい、ほんの少し動かしたただけでしたが、ギンにはその片足の靴のひもが、さつきちらと見たように、ちがった結びかたがしてあるのが目につきました。ギンはやっとそれで見わけがついたので、

「わかりました。この人です。」と、いさんでまえへ出て、その女をゆびさしました。おじいさんは、

「なるほどよくあたった。それではこの娘をあげるからお家へつれておかえりなさい。私は、娘が一と息で数えるだけの、羊と牛と山羊やぎと馬と豚を、お祝いにやりましょう。しかしお前さんが、これからさきこの娘を、何のつみもないのに、三べんおぶちだと、すぐにこちらへとりもどしてしまいますよ。」と言いました。ギンはおおよろこびで、

「いえいえけっしてそんなことはいたしません。この人をぶつくらいなら、私の手の方を先に切つてしまいます。」と、あらためておじいさんにもちかいました。おじいさんはそれを聞くと安心

して娘に向つて、おまえのほしいと思う羊の数を、一と息で言つてごらんと言いました。娘はすぐに、

「一、二、三、四、五。一、二、三、四、五。一、二、三、四、五。」と、一度の息がつづくかぎり五つずつ数をよみました。すると、それだけの羊が、すぐに水の下から出て来ました。

おじいさんは、今度は牛の数を一と息でお言いなさいと言いました。娘がまた同じように、

「一、二、三、四、五。一、二、三、四、五。一、二、三、四、五。」と息がつづくまで数えますと、その数だけの牛が、また一

どに湖水の中から出て来ました。同じようにして、そのつきには山羊、山羊のつきには馬、それから豚というふうに、すっかりそ

ろいました。そして牛は牛、山羊は山羊でじゅんじゅんにならびました。それと一しよに、おじいさんともう一人の娘は、いつの間にかふいに姿をかくしてしまいました。

湖水の女とギンとは、この上もなく仲のよい夫婦になって、たのしくくらししました。

## 二

二人の間にはかわいらしい男の子が三人生れました。そのうちに一ばん上の子どもが七つになりました。

すると、或とき、知合の家に御婚礼があつて、ギンも夫婦で

よばれていきました。二人はじぶんたちの馬が草を食べている野原をとおつていきました。そうすると女は、途中で、あんまり遠いから、あかし私はよして家へかえりたいと言いました。ギンは、

「だって今日きょうばかりは、どうしても二人でいかなければいけない。歩くのがいやなら、お前だけは馬でいけばいい。あすこにいる馬をどれか一匹つかまえておおき。わたし私はその間あいだに家へいつて、手た綱づなと鞍くらをもつて来るから。」と言いました。女は、

「ようございます。それではちゃんとつかまえておきますから、ついでにテイブルの上においてある私の手袋をもつて来て下さい。」と言いました。

ギンは急いで引きかえして、鞍と手綱と、手袋とをもつて出て

来ますと、女は、さつきからそのままじつとそこに立ったきりで見ました。ギンは、

「何をぼんやりしているの。早く馬をつかまえてお出いでよ。」と、もつて来た手袋の先でじょうだんにちよいと肩をたたきました。

「まあ、あなたはこれで一つ私をおぶちになりましたよ。私が何の悪いこともしないのに。」

女はため息をつきながらこう言いました。ギンはこの人をもらったときに約束したことを、すっかり忘れていました。

女は間まもなく馬に乗って、二人で向うの家うちへいきました。

それからまたいく年もたつてから、二人は或あるとき、今度は或家うちの名つけの祝いによばれていきました。人々はそれぞれ席につい



て、ゆかいにさかずきを上げました。すると湖水の女は、ふいに涙をながして、一人でかなしそうにすすり泣きはじめました。

ギンはおどろいて、そつとその肩をたたいて、どうしたのかと聞きました。

「だってあの罪のない赤ん坊は、あんなにからだがひよわいんですもの。あれではせつかく生れて来てもこの世の喜びというものをうけることは出来ません。見ていてごらんなさい。きつと病気で苦しみとおしてなくなってしまうから。ですがあなたこれで二度私をおぶちになりましたよ。」

こう言われて、ギンは、しまったと思いました。もうあと一度になりました。もう一度うっかりぶちでもしたら、女はもうそれ

きり水の中へかえつてしまうのです。三人の子どもたちにとつてもだいいじなお母かあさまなのですから、いかれてしまうと、それこそたいへんでした。

ギンはそれから毎日気をつけて、そんなことにならないように、要ようじん心していました。

それから間もなく、ギン夫婦が名つけの祝いによばれていった赤ん坊が、ひどい病気をして死んでしまいました。

ギン夫婦はそのおとむらいにいきました。そうすると、湖水の女はみんなが泣きかなしんでいるまんまえて、うれしそうにはつはと笑い出しました。みんなは、あつけにとられて女の顔を見ました。ギンもびっくりして、あわてて肩に手をかけて、

「おい、何です。しずかにおしなさい。」と言いました。ギンはみんなの人にきまりが悪くて、ほんとうに顔から火が出るような気がしました。

「だって、うれしいじやありませんか。赤ん坊はこれですっかりこの世の苦しみをのがれて、神さまのおそばへいくのですもの。」

女はこう答えて、

「しかしあなたはこれでどうとう私を三べんおぶちになりました。ではさようなら。」と言うなり、さつさとそこを出て行ってしまいました。

女はそれから急いで家へかえって、湖水から出て来た羊と牛と山羊と馬と豚をよびあつめました。

「灰色のぶちの牝牛よ、めうし

大きなぶちの牝牛よ、

小さなぶちの牝牛よ、

白いぶちの牝牛よ、

みんなここへお出いでなさい。

芝生しばふにいる、

その四ひきもお出でなさい。

それから灰色のお前も、

王さまのところから来た、

白い牝牛も、

その小さい黒い小牛も、早くお出で。

さあさあみんなでかえりましょう。」

こう言つてよびますと、そちこちで草を食べていた牛は、すぐに大急ぎで女のそばへあつまつて来ました。四ひきの牝牛は畠はたけをすいていました。女は、

「おいおい、その灰色の牝牛たちよ、

おまえもお家へかえるのだよ。」

と、その牛も呼びました。それから羊も山羊も馬も豚も、すっかりあつまつて来ました。そしてみんなで列をつくつて、女のあとについて、どンドン湖水の中へかえつてしまいました。

ギンは気きちが狂がいのようになつて、あとを追つかけていきましたが、もう女の姿も牛や羊や馬の影も見えませんでした。ひろびろとし

たさびしい湖水の上には、ただ、四ひきの牝牛が引いていったすきのあとが、一とすじ残っているばかりでした。

ギンは悲しさのあまりに、そのままその湖水の中へ飛びこんでしまいました。

のこされた三人の子どもは、こいしいお母さまをたずねて、毎日泣き泣き湖水のふちをさまよいくらしていました。すると女は或<sup>あるひ</sup>日水の中から出て来て三人をなぐさめました。

「おまえたちは、これから大きくなって、世の中の人たちの病気をなおす人におなりなさい。それにはお母さまが、いいことをおしえてあげるから、こちらへいらつしやい。」

こう言つて、三人を或<sup>たにま</sup>谷間へつれていき、そこに生<sup>は</sup>えている、

薬になる草や木を一々おしえておいて、ふたたび湖水へかえりま  
した。三人はそのおかげで、国中じゆうで一ばんえらいお医者さまにな  
り王さまから位くらゐと土地とをもらつて、一生らくらくとくらしまし  
た。そしてたくさんの人の病気をなおしました。





# 青空文庫情報

底本：「鈴木三重吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年11月18日第1刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第二卷」文泉堂書店

1975（昭和50）年

初出：「湖水の女」春陽堂

1916（大正5）年12月

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 湖水の女

鈴木三重吉

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>